

かめのり大学院留学アジア奨学生
月次報告レポート
(2018年5月)

■研究進捗状況

5月は、日大全共闘を研究してきた私に衝撃を与えた一ヶ月だった。その理由は「日大アメフト部の反則タックル事件」が起こったからである。記者会見が開かれるなど連日続いて世間が騒ぐほど大事件であった。最初は、スポーツのルールとして扱われるかと思いきや、体育系部活の組織構造にかかわる問題さらには「大学」問題にまで拡大した。

5月26日の東京新聞には「「日大闘争」半世紀」というタイトルで、日大全共闘当事者たちが実際にアメフト部問題についてどう見ているのかについてインタビューした内容が載せられていた。かれらは「自分たちが闘ってから五十年。日大の体質は何も変わっていなかった」と言った。私の修論でも日大闘争の発端について詳細に書かせてもらった。闘争が起った背景として学生活動の権威主義的な規制を注目したのである。

当時の理事会会頭古田重二良は、「日本精神」の涵養を追求し、日大の生活指導の体系を編成した。古田は、柔道8段であり事務官僚出身の人物であった。彼は、保守的思想を持っており、日大の基本政策を保守的なものとして先鋭化しようとした。古田は、「日大は日本精神を基にして学問の系統を重要視し……」と改正しただけではなく、日大を改善するという名目の下、営利主義に重点をおいた経営基盤の強化と「大家族主義」的教育体制が主としたのである。ここで、古田が唱えた「日本精神」とは、「大家族主義」を示す。つまり、大学教育は調和して成り立たなければならないことである。日大が重視したキーワードである「家族」と「調和」は、ややもすれば民主主義と平和両立可能なイメージとして連想されるかもしれないが、実は「力」それ自体を意味するのである。この時期から日大理事会の会頭は体育会系出身であり、体育会系右翼学生を用いて全共闘学生たちを暴力的に制圧した。これは現在の日大体育会系の形態と大きい変わりはないとみられる。

日大闘争はもちろん、さまざまな闘争で全世界が「革命」を唱えた時期が、2018年の今年で50周年を迎えた。そのため、あらためて1968年を考えるプロジェクトが行われ始めたと思う。5月の終わりから6月のあたまでゲーティンスティテュート東京にて「1968年」を掲げた映

画上映会およびシンポジウムが行われている。当時制作されたドイツ（オーストリア）・日本の映画が上映されながら、日本とヨーロッパの「1968 年」があらためて表現され、その時代についての意味を考えさせるのが目的であろう。

私も日大全共闘当事者たちに直接会って話をしたり、シンポジウムに参加させていただいている。6 月も（日大全共闘結成の 50 周年であるため）様々な企画が多くて調査のため、さらに忙しくなる予定である。

■生活状況

5 月は、日大全共闘当事者たちにたくさん出会えた大事な一ヶ月でした。それでとても忙しかったのですが、週末を使って気晴らしに名古屋に短く旅行に行ってきました。名古屋は美味しい食べ物がいっぱい溢れる地域として知られていますから、行きたいと常に思っていました。旅行期間が短かったので、手羽先、みそカツ、ひつまぶししか食べられませんでした。でも、とても美味しく大満足でした。また今度チャンスがあれば、行くつもりです。